

この人に
聞く ③

根占の名を全国に発信

十津川農場社長

玉置 博祥さん (82)

本土最南端の南大隅町の特産品「ねじめびわ茶」。製造する十津川農場(南大隅町根占横別府)は、地域に根差して24年目になる。地縁、血縁のないところから始めた玉置博祥社長(82)は現在、町商工会の会長を務める。会社の歩みを振り返りつつ、町の未来像についても聞いた。

一住民の半数は高齢者で、過疎化が進む南大隅町をなぜ選んだ。

「地球環境と人に優しい商品を考える中、中国では漢方として使われるビワの葉と、ビワの生産が盛んな根占に行き着いた。『食は命なり』で、21世紀はスローフードの時代が来ると確信していた。風土に合った伝統的な食文化や食材を大切にしてい直す時代だと捉え、50代後半から新たな挑戦を始めた。生産から加工・販売まで手がける6次産業や未利用資源の活用に、20年以上前から取り組んできたわけだ」

一会社名と商品名にそれぞれ地名が入っている。

「社名は出身の奈良県十津川村から取った。何があっても会社をつぶしてはいけない、という戒めにしている。ねじめびわ茶は、根占を全国に知ってもらおうと名付けた。びわ茶は特許製法で作っており、カフェ

インを含まず、子どもから高齢者まで気軽に飲めて、まろやかで香ばしい味わい。鹿児島大学と共同で機能性成分の研究にも取り組んでおり、ミネラルやポリフェノールを多く含むことが判明している」

一社内はどんな体制か。

「スタッフは31人で、地元の人を中心に。親の介護のために帰ってきたUターン者や、Iターンの若者の受け皿となっている。定年制を設けていないのが特徴。雇用の面でも地域役に立ちたい」

一新型コロナの影響は。

「売上げは落ちたが、プラスの面もあった。社員の意見を聞く機会が増え、作業の効率化のために設備投資をした。例えばびわ茶のティーバッグを平織りからテトラ型に変えた。ただ、その後の物価高は大きなダメージで、値上げを考える必要性が出てきた」

ビワ葉で6次産業化 ■ 雇用創出し地域活性化



たまき・ひろよし 1940年、奈良県十津川村出身。東京の大学を卒業後、繊維メーカーに就職。福岡で繊維関係の会社役員などを経て99年に十津川農場設立。

一今後の展開をどうする。

「新製品の開発は無限大だ。今年には既に、喉越しが良く、和洋中の料理に合うびわ茶を販売開始した。取り扱う品目を増やし、客のニーズに応えていく。コロナ下で自粛して

いた台湾、香港といった海外販路の拡大活動も再開したい」

一2021年から町の商工会会長を務めている。

「地域への恩返し、ご奉公だと思っている。人口が減る中、町が生き残るには観光が重要。佐多岬や雄川の滝にはライダー客も多いが、飲食店などが少ないため、地元にお金が落ちて潤うまでに至っていない。錦江町や対岸の指宿市も巻き込んだルートづくりや、フェリー増便を含むインフラ整備が欠かせない。特産品を扱う青空市のようなイベントで盛り上げるのも大事だ」(永井貴士)

お気に入り

書道

10年ほど前、ふと思いついて書道に目覚めた。以来、無手勝流で続けている。毎朝午前6時ごろに起きると、顔を洗うより先に、「運氣到来一日が一生涯感謝の心で」と書く。「調子が良いときは、筆の伸びが良い。朝のひととにき、無心になれるので気に入っている」。日々の健康のバロメーターとしている。